

# 「江東避乱聯句」(仮称) について

朝倉 尚

広島大学総合科学部 教授

## 1) 避乱と禅林聯句

「江東避乱聯句」という呼称・名称は、筆者が仮に命名したものであり、現在、まとまりある作品集として存在している訳ではない。ある時点まで存在したかもしれない禅林聯句の作品集、あるいは一集として編まれることが可能であったと筆者が考える聯句集に対して、仮に命名したものである。

「江東避乱聯句」の内容は、横川景三(1429-93)、桃源瑞仙(1430-89)、景徐周麟(1440-1518)ほかの聯衆が興行した、三〇巻三〇〇〇句の禅林聯句である。応仁元年(1467)八月から同二年四月までの間に、近江国山上は永源寺を中心にして興行されている。これら聯句に対して「江東避乱」と命名したのは、応仁の大乱により京洛から乱を避けて、近江国の東部・琵琶湖東畔に位置する永源寺を拠点とする地方に逃避した間に成立したことに因る。

この間の避乱と聯句製作の状況について、詳しく細述する。横川景三が京洛の相国寺常德院小補軒を脱出して、桃源瑞仙とともに、近江国に向けて避乱の旅を始めたのは、応仁元年八月二十四日のことであった。同日の夕刻に坂本で乗船、二十六日にやっとの思いで兵主にある安楽寺の月翁周鏡(1419-1500)の許に辿り着き、晦日まで滞在する。この間、二十五日の夕刻には、舟子(実は、賊)に出船を拒否されて途方に暮れながらも、聯句「数十句」に興じている。が、避乱中の、いわゆる「江東避乱聯句」の試みが始行されるのは、二十六日に安楽寺に到着して、一時の安心を得てからである。

一行は、八月晦日に安楽寺を退去し、桃源の郷寺である市村の慈雲庵に到着する。慈雲庵には、しばらく十一月二日まで滞在し、この間、九月二十九日に景徐

が一行に合流し、十月十一日から十五日にかけては永源寺に遊んでいる。次いで、十一月二日からは、佐久良の武将・小倉実澄の用意した、永源寺下の曹源寺竜門庵に寓住することとなる。竜門庵で越年した一行は、二月二十三日に景徐が草野の両親(大館持房夫妻)を慰問するために永源寺より離山するが、四月を迎える。この間に、江東避乱聯句の興行は継続された。そして、余すところは、平声三〇韻の中で<sup>22</sup>「陽韻」聯句の一巻一〇〇句のみであった。

応仁二年四月上旬、桃源の門生である一初景統は、嚴重な警護付きの尾張商人に随っての上京途次に、山上永源寺を慰問している。横川はこの時に当たり上洛を決意し、一行に随って第一回の上京を果たす。その途中、四月十日、漏山(守山)の宿に一泊し、<sup>22</sup>「陽韻」聯句を興行し、ここに平声三〇韻による江東避乱聯句三〇巻の試みを完成している。

上述した避乱と聯句製作の経緯については、主として雑誌論文「戦乱の文芸としての禅林聯句 - 「小補東遊集」と「江東避乱聯句」(仮称) - 」(『國語と國文學』第76巻第1号所収、平11・1)や「戦乱における禅林の文芸 - 応仁の大乱をめぐる一禅僧(横川景三)の軌跡 - 」(『中世文学研究』第25号所収、平11・8)において論述した。

## 2) 「江東避乱聯句」(仮称) 想定経緯

作品集としての「江東避乱聯句」の存在を想定し、命名するに到った過程を報告する。なお、平声三〇韻による聯句であるために、各作品に私に作品番号を施す際には、その韻の配列順に、例えば前掲<sup>22</sup>「陽韻」聯句のように表記する。

### ① 『梅花無尽蔵(句集)』所収の「東遊集」「東遊」註記聯句

『梅花無尽蔵(句集)』(内閣文庫所蔵。全八冊)が、「梅花無尽蔵」の書名を冠しながら万里集九の別集ではなく、平声三〇韻の聯句作品を多数収めた総集であることは周知の事実である。集中、前述の横川以下の一巻の聯句が含まれることも、早くより指摘されていた(中川徳之助「五山禅林における詩論の特質」『連歌と中世文芸』所収、角川書店・昭52 ほか参照)。その根拠としては、横川の別集『小補東遊集』(底本・永源寺所蔵)に収載される「聯句」と題されて「八月廿六日、會安楽窩、菅廂・化蝶・童堂、皆寺十境」と註された

一卷が、『梅花無尽蔵(句集)』所収の「八月廿六日、會安楽窩、東遊」註記の⑪「真韻」聯句と一致することがある。次いで、上記の「東遊」註記に注目する時、『梅花無尽蔵(句集)』では、以下のような結果が得られる。

作品番号	韻(巻)	註記
①	東	八月晦、會慈雲庵、東遊集
②	冬	東遊
③	江	東遊
④	支	十一月十七日、冬至、東遊
⑤	微	二月旦、東遊
⑥	魚	九月二十五日、菅丞相祭日、慈雲鎮守、東遊
⑦	虞	十二月旦、東遊
⑧	齊	十月廿一日、會慈雲庵、東遊
⑨	佳	戊子正月五日、立春、東遊
⑩	灰	九月十三日、東遊
⑪	真	八月廿六日、會安楽窩、東遊
⑫	文	九月廿三日、東遊
⑬	元	重九、東遊
⑭	寒	東遊
⑮	刪	東遊
⑯		
⑰	蕭	東遊
⑱	肴	東遊
⑲	豪	會曹源寺、東遊
⑳	歌	東遊
㉑	麻	東遊
㉒	陽	東遊
㉓	庚	八月廿八日、會易春庵、東遊
㉔	青	此日、木奴子自京辟〔遊〕難至、東遊
㉕	蒸	東遊
㉖	尤	東遊
㉗	侵	東遊
㉘	覃	東遊
㉙	塩	東遊
㉚	咸	東遊

聯句会が興行され、聯句が製作された期日、場所などが明記されている例も多い。それらの中には、避乱途次の作品を大略製作順に収める『小補東遊集』所収の「小補東遊集」部分を主に参照して概略を説明した、前述の避乱の経過と状況が一致しているものが含まれる。その結果、まず、

イ、上記の二九巻の聯句は、おそらく元来は同一の作品集に収められる、同一の試み・企画による興行作品である。

ロ、二九巻の聯句の試み・企画は、元来は平声三〇韻の各韻について興行、完結することを目的とした、などの点に気付く。

イについて問題となるのは、「東遊集」「東遊」註記の解釈である。二九篇の中の二八篇までが「東遊」とある。「東遊」をそのまま素直に解釈すれば、「都からは東方に相当する地方への遊学」の意である。聯衆である横川一行、中でも横川の東遊中に興行、成立した聯句の意に解される。一方、わずかに一例ではあるが、平声韻の順序に従って収められる『梅花無尽蔵(句集)』の冒頭部分・東韻の部に配される①「東韻」聯句に対する註記が「東遊集」であるということは、かなり重い意味を有しているように思われる。「東遊集」の註記がより精確であるとする、②「冬韻」聯句以下の「東遊」註記は、「東遊集」の省略形と解されることになる。ただし、この「東遊集」をいかに解するかについては、なかなか難関である。

- i 「東遊」に際して製した作品の集
- ii 横川の別集『小補東遊集』
- iii 聯句集としての『東遊集』

などの解釈が可能であろう。

i に関して、江東に避乱したことを「東遊」と称することは、前掲のごとく横川自身が自己の作品集に「小補東遊集」と冠していることから、当代の禅僧にとって何ら異和感の無い称呼であることが判明する。集には聯句が含まれていたことが前提となるが、そのほかの詩や文が含まれていたか否かについては不明である。聯句のみの集ということであれば、iiiに一致する。

ii に関して、『小補東遊集』の構成は、応仁の乱を避けて近江国山上の永源寺に寓住した期間に製した作品を集める「小補東遊集」と、数量は少ないが応仁二年四月に一時的に帰洛して以降の作品を集めた「小補西帰集」とから成る。特に「小補東遊集」については、禅林聯句の集としての性格を有する。聯句の興行を記述することを抜きにして成立、完成しなかった作品集である。なかでも、その前半部においては、聯句に添えられたとおぼしき序文や跋文が頻出するのである。底本・永源寺所蔵本では⑪「真韻」聯句の一篇を収載するにしか過ぎないが、他の聯句作品が収められても決して不自然ではない集の内容・構成であるように思う。そこで、横川の作品集には別種の「小補東遊集」が存在したことを自身が明記していることもあり(横川

『小補東遊後集』所収「小補東遊集序」文参照）、現存する『小補東遊集』に聯句作品が加わる、別本『小補東遊集』がかつて存在したとする可能性を追求する余地は存する。そもそも、聯句一篇は、通常複数作者によって製作されるため、個人の作品として見做され難い。一方、他人・読者への提供を前提とする場合、あるいは何らかの公的性格を付与しようとする場合には、聯句本文に序文や跋文が添えられる慣習も次第に普及している。序文や跋文の類は、それだけで独立した個人の作品として見做されている。かくして、聯句本文を個人の作品としても扱うか、あるいは扱わないかによって、別集の体裁は異なり得る。ii は、聯句本文とそれに添えられた跋文や序文の類で作品一篇と見做し、さらには本来協同作品である聯句本文も個人（横川）の作品と見做して編纂した作品集を想定したものである。別の視点から言えば、ii については、現存の『小補東遊集』は、聯句の本体をも収載した別本『小補東遊集』から、永源寺所蔵本の場合是一篇・⑪「真韻」聯句のみを例外として、序文や跋文の類は残しながら、聯句本文を削除して成立した可能性を想定した集である。

iii に関しては、江東避乱聯句を集めて一つの作品集が編まれたことを想定したものである。聯句集『東遊集』の存在については、江東避乱聯句三〇巻の前半部（上平一五韻）の聯句に解説を加えている抄物『湯山聯句』（大谷大学図書館所蔵。全一冊）と、後半部（下平一五韻）の聯句に解説を加えている抄物『成吠詩集』（竜谷大学図書館所蔵。全一冊）の存在を考える時は、大いに可能性の存する想定である。両抄物作品集が、聯句集『東遊集』の前半部の聯句と後半部の聯句とに解説を加えたものであり、元来は僚巻ではないが、祖本が一つであることを無理なく説明することができる。次いで、聯句集『東遊集』としては現存しないが、次のような指摘がある。策彦周良や江心承董を中心に、天竜寺山内を主舞台に興行された聯句九〇巻九〇〇〇句を、平声三〇韻の順序に従い、各韻につき三巻三〇〇句を収載した聯句の総集に『城西聯句』がある。この集に付される弘治二年（1556）九月に製された、惟高妙安の跋文からの引用である。

近來吾山横川師，有江東識廬三千句，景徐翁有津南湯山一千句，是皆膾炙叢林，盛哉，  
近來，禪林において膾炙した聯句集として、横川景三の「江東識廬三千句」と景徐周麟の「津南湯山一千句」の名を掲げている。いずれも当該聯句（会）を企画、

主催した連衆の代表の作品（集）として特記している。「津南湯山一千句」は、撰津国湯山（現、有馬温泉）で興行された聯句で、聯句集としては現存しないが、抄物『湯山聯句鈔』として流布している。「江東識廬三千句」こそは、いわゆる江東避乱聯句（集）を指すと考えられる。「江東識廬三千句」は、当代の聯句（集）の代表であると同時に、『城西聯句』のような禪林聯句の総集の先蹤として処遇されていることを知る。ただし、横川が小倉実澄の全面的な後援を得て、永源寺山内に識廬庵を構築・落成するのは、文明元年（1469）十二月のことであり、江東避乱聯句に「識廬」の称を冠しては矛盾・不合理が生じることになる。惟高の誤解による称呼と言わねばならない。筆者が惟高の称呼を知りながら、仮に「江東避乱聯句」と称する理由の一つでもある。同時に、「江東識廬三千句」の称呼は、聯句集『東遊集』との関わりで言えば同一集を指す訳であり、江東避乱聯句（集）に対する名称・称呼そのものについては流動的であったことをも示していよう。横川を代表とする一行の江東永源寺を中心にした避乱聯句三〇巻三〇〇〇句は、その存在は著名であり、広範に流布していたようであるが、集としての命名は流動的であり、いずれも現時点まで伝存するものが無い。聯句集「東遊集」もかつて存在した候補の一つとして考えることができよう。

口について問題になるのは、欠けている一巻・⑫「先韻」聯句の所在である。『梅花無尽蔵（句集）』において、先韻の聯句作品群が収められるのは、第五冊の巻初の部分で、第一丁表より第三九丁裏までが相当する。第一丁表には「和学講談所」や「浅草文庫」等の蔵書印が捺されているが、冒頭の作品として収められるのは「如是禾上点，点汚四十五句之内，批者十三，圈者四句」と註された「又」韻の聯句一巻である。この一巻の第唱句と入韻句は「遠慕春遊薛，有花即帙筵」であり、『城西聯句』（一名、九千句）の先韻聯句に収められる三巻の内の一巻と一致している。

『梅花無尽蔵（句集）』は、平声三〇韻の韻別に聯句作品群が配されるが、各韻の冒頭作品については、例えば「東」「冬」のように韻目が明記されるのが常である。そして、多くの韻の作品群において、その冒頭を飾るのが「東遊」と註記された江東避乱聯句である。

如上のような状況を勘案すると、第五冊の冒頭には、原本の段階において、さらに少なくとも一丁が存在したのではあるまいか。これに書写、収載されていたの

が、おそらくは「東遊」と註記された⑩「先韻」聯句であろう。現存の第五冊は、後に冒頭に存した少なくとも一丁を外して、新たに装幀されたものとする。

上述の一部分については、雑誌論文「戦乱の文芸としての禅林聯句 『湯山聯句』『成吠詩集』『梅花無尽蔵』『聯句集』について』(『中世文学研究』第24号所収、平成10・8)において論述した。

## ② 『聯句集』所収の江東避乱聯句

『聯句集』(足利学校遺蹟図書館所蔵。全八冊)については、元来は一〇冊一組であり、平声三〇韻の聯句が、原則として各韻別に作品群として収載されていたと解する。現存する八冊には、二三巻(韻)の江東避乱聯句が収められる。残りの七巻(韻)については、何らかの事情で欠けた二冊(十冊本の第七冊と第九冊に相当)に含まれていたと推される。

収載される二三巻の特徴の一つとして、抄文を付した巻と、抄文を持たない聯句本文のままの巻が存在することがある。なお、集中において抄文をも付した聯句は、すべて江東避乱聯句に含まれるものである。前例に倣って一覧表を提示すると、次のようになる。

作品番号	韻(巻)	註記	抄文
①	東	八月晦日、會慈雲庵	有
②	冬	十一月十日	有
③	江	元宵	有
④	支	十一月十七、冬節	有
⑤	微	三月旦	有
⑥	魚	九月廿五日、菅丞相祭日、慈雲鎮守、東遊	無
⑦	虞	十二月旦、東遊	無
⑧	齊	十一月廿一日、會慈雲庵	有
⑨	佳	戊子、正月初五日、立春	有
⑩	灰	九月十三日、東遊	無
⑪	真	八月廿六日、會安樂窩、菅庵・化蝶・童堂、皆寺十境、東遊	無
⑫	文	九月廿三日	有
⑬	元		有
⑭	寒	東遊	無
⑮	刪		有
⑯	先	十月晦日、會慈雲庵	有
⑰	蕭		無
㉑	麻	東遊、慈雲庵、十月初雪	無
㉒	陽	日本江州瀨山宿ニテノトミヘタリ、東遊	無
㉗	侵	九月晦日、天竜開山年忌也	有
㉘	覃		有
㉙	塩		有
⑳	咸	丁亥八月廿八日、會白花殿 <input type="checkbox"/>	有

抄文を有するものは一五巻(韻)を数える。抄文を欠いた八巻については、七巻までに註記中に「東遊」が含まれている。⑰「蕭韻」聯句については註記を亡失したと考えれば、抄文を欠いた八巻すべては「東遊」註記を有する本、あるいは「東遊」集を収集源にしていることを示すことになる。

『聯句集』の編者は、なるべくなら韻別作品群の冒頭に配するなど、江東避乱聯句に重要な位置付けを与えているが、収載に際しては、抄文を有する某集と、これを欠いた「東遊」集と、性格の異なる二系統の本に拠っていることが判明しよう。

「東遊」の意味するところについては、①項と同様である。なお、上述の一部については、前掲『中世文学研究』第24号所収論文において触れている。

## ③ 平松本『聯句集』(Ⅰ)所収の江東避乱聯句

『聯句集』(京都大学・平松文庫所蔵。全一二冊。平松本『聯句集』(Ⅰ)と略称)は、元和・寛永年間の聯句を収める二冊と、平声三〇韻の聯句を各韻別に作品群として配する一〇冊とに大別される。いま、後者の一〇冊について、仮に平声韻の順序に従って一〜一〇までの冊順を決めて検討を進める。

江東避乱聯句は、一〇冊に配される各韻の作品群中に収載されていることがある。この収載状況を、前例に倣って一覧表化すると、次のようになる。

作品番号	韻(巻)	註記
②	冬	十一月十日、東遊集内
③	江	元宵、東遊集之内
④	支	十一月十七日、冬至、東遊
⑤	微	東遊集、二月旦
⑥	魚	東遊集
⑧	齊	十月廿一日、會慈雲庵、東遊
⑨	佳	「東遊集(傍註)戊子正月初五日、立春乎
⑩	灰	九月十三日、東遊
⑪	真	八月念六日、會安樂窩、東遊集之内
⑫	文	九月念三日、東遊
⑬	元	重九、東遊
⑭	寒	東遊
⑮	刪	東遊集
⑰	蕭	東遊
⑱	肴	東遊
⑲	豪	東遊集、會曹源寺
⑳	歌	東遊
㉑	麻	小春廿八日、初雪之句也

作品番号	韻(巻)	註記
②②	陽	小補和尚之両〔西〕帰集
②④	青	東遊集, 此日木奴子, 自京避難至
②⑤	蒸	東遊集
②⑦	侵	東遊集
②⑧	覃	
②⑨	塩	東遊集
③⑩	又(嚴)	東遊集

江東避乱聯句三〇巻(韻)の中で、収載されたものは如上の二五巻である。二五巻の中で、註記を欠いているものはわずかに一巻に過ぎない。二四巻に施された註記の中では、②①「麻韻」聯句のみが、典拠に触れた記述を欠く。残り二三巻については、これまでも認められた「東遊」が九巻、「東遊集」が一三巻にわたり表記される。『梅花無尽蔵(句集)』にわずかに一例認められた「東遊集」註記が、平松本『聯句集』(Ⅰ)では「東遊」註記を圧倒しているのが特徴である。しかも、一三巻の中の一巻・④「佳韻」聯句では、韻目「佳」の右肩より朱書により註記されている。集中においては特別の措置であり、書写時より後に補註された可能性も高いが、読者の注意を喚起している。「東遊」「東遊集」の意味するところについては、①項で触れたことに付け加えることはない。なお、平松本『聯句集』(Ⅰ)では、「東遊」集と「東遊集」の二系統より収集したと考えるよりは、横川以下の一行が「東遊」の折に興行した聯句を収載する「東遊集」を収集源としたと考えるのが妥当ではあるまいか。次いで、註記の中で最も注目されるのは、②②「陽韻」聯句における「小補和尚之両〔西〕帰集」である。小補和尚は横川景三を指し、「両帰集」と判読されるが、「西帰集」の誤写であろう。「西帰集」は、『小補東遊集』の後半部に収められる、「小補西帰集」を指すと考える。「小補西帰集」は、前述のごとく、応仁二年四月に一時的に上洛・帰洛してからこの作品を収めている。したがって、②②「陽韻」聯句が「小補西帰集」に収められるということは、時間的には不合理を生ずることになる。ただし、永源寺所蔵『小補東遊集』では、「小補東遊集」と「小補西帰集」に次いで、末部に意味深長な三篇の作品が付されている。一篇は瑞深周鳳(1391-1473)が横川のために製した「小補東遊集后叙」文であり、この瑞深の跋文によって『小補東遊集』は完結していたと解することが可能である。が、集ではさらに、応仁二年二月二十三日に草野の親許を訪れる景徐に託された詩文と、最末尾の一篇として、江東避乱聯句三〇巻の最終興行作品・②②「陽

韻」聯句が前述のごとく横川の第一回目の帰洛途次の同年四月十日に興行された経緯の記述を含んだ文章を添える。この二篇については、聯句興行に関わる記述が中心部に存するという共通しており、結論を先に言えば、聯句に付されていた作品ではあるまいか。前者は序(跋)文としては少しく変則であるが、①⑧「肴韻」聯句に付された詩文、後者は②②「陽韻」聯句に付された序(跋)文であると解する。二篇は、当初においては当該聯句とともに単独でも流布したが、後人の手によって、おそらくは横川自筆本(系)の祖本『小補東遊集』に補入されるに際して、聯句が切り離されて、詩文と序(跋)文のみが追補されたのではあるまいか。

平松本『聯句集』(Ⅰ)のばあい、永源寺所蔵『小補東遊集』のごとく、「小補西帰集」の後に付篇が加わる本を収集源とし、そのために、この付篇を「小補西帰集」の作品と見做して「西帰集」と註記したという可能性が考えられる。ただし、その際には、追補された付篇は、聯句本文とともに収められていたことになる。そして、その収集源になった『小補東遊集』については、「小補東遊集」部においても、聯句本文が切り捨てられたり、切り離されたりしないで、二八巻(韻)が収められていたものか否か、興味のあるところである。かくして、平松本『聯句集』(Ⅰ)における「西帰集」註記の存在は、これまでに引用した「東遊集」註記が、作品集としての聯句集『小補東遊集』よりも、むしろ聯句を含んだ「小補東遊集」部分を指す可能性を強く印象付けたように思う。

#### ④平松本『聯句集』(Ⅱ)所収の江東避乱聯句

『聯句集』(京都大学・平松文庫所蔵。全一五冊。平松本『聯句集』(Ⅱ)と略称)は、全貌が未解明のままの書冊である。保存の状況に即して言えば、下部の四冊(12~15冊)を除いた一冊(1~11冊)が聯句を収めた書冊である。一冊はいずれも小冊子であり、収載・書写の途次を思わせ、それほど多くの作品を収めてはいない。平声の韻別に筆録されようとしたようで、表紙にはそれぞれ収められる聯句の韻目が、東、冬、微、虞、齊、佳、灰、刪、陽、覃、豪、咸、嚴、支、齊、文、蕭のように表題(打付け書)されている。ただし、「支齊文蕭」冊には作品は載せられていない。そこで、本稿で対象となる冊子は一〇冊、巻(韻)は一二ということになる。前例に倣い、収載された江東避乱聯句について一覧表にして示すと、次のようになる。

作品番号	韻(巻)	註記
⑦	又(虞)	十二月旦, 東遊
⑨	又(佳)	東遊集, 戊子正月初五日, 立春乎
⑩	又(灰)	九月十三日, 東遊
⑮	又(刪)	東遊集
⑲	又(豪)	東遊集, 會曹源寺
⑳	又(咸)	東遊集

対象となった一二巻中, 集中に収載されるのは半数の六巻である。その註記にはいずれも「東遊」「東遊集」が明記される。「東遊」註が二巻に対して、「東遊集」註が四巻である。平松本『聯句集』(Ⅱ)は同(Ⅰ)と同様の傾向を示していることが判明する。

### 3) 今後の課題

横川の作品集『小補東遊集』, 禅林聯句の総集, 抄物を利用して, 横川以下の一行が江東への避乱を契機として企画, 実施した聯句会と聯句作品に対して, 現状では仮称「江東避乱聯句」として想定し, 論を進めている経過を報告した。まずは, この三〇巻(韻)三〇〇〇句の聯句が, いかなる形で流布, 伝存されたかを探求する一環として, 「東遊」「東遊集」「西帰集」註記に留意して検討を進めた。結論が導き出された訳ではなく, 屋下に屋を架す結果になっている。が, これも「江東避乱聯句」を本朝における禅林聯句史上における, 早い時期の記念すべき作品集として位置付けたいとの思いからである。

「江東避乱聯句」(仮称)の研究は, その緒に就いたばかりである。そもそも禅林聯句の定義については, 現状では,

作者の眼前の景や, 座衆が共通に理解の可能な心情を素材として, 常に対句と機縁を念頭に置きながら, 先行の諸文芸より密接に関連した典拠を用いて表現し, 二句一聯によって最小単位のまとまりある世界を共同で築き上げようとするものである。

と考えている。

素材の面で不可欠な要素として, 「当座性」の尊重があげられる。「江東避乱聯句」(仮称)の三〇巻三〇〇〇句については外貌が現出した段階であり, いまや「作者の眼前の景」や「座衆が共通に理解の可能な心情」を反映して, 各句の解釈や鑑賞を試み得る条件が整えられたと言えよう。禅林聯句の特徴的な作句法に, 「対句と機縁」の重視がある。機縁については, 「表面上は叙情なり叙景なりの語として用いているが, さらに裏面において同座している座衆の存在を知らせているとい

う法」である。対句と機縁とは, いずれも禅僧にとって必須の留意要件である, 主要公式文書の文体である禅林四六文の構成要素をなしている。そこで, 禅林聯句は, 禅林四六文・対句と機縁に習熟するための手段としても有効であった。次いで, 表現の面で重要視されたのは, 「観念的世界の展開」であった。「先行の諸文芸より密接に関連した典拠を用い」るためには, 禅僧は平素より自己の観念的世界を磨いておく必要があった。なお, 裏面において同座の聯衆の存在を知らせる機縁の手法を駆使するには, 先行文芸によってそれに示される人物・事件・事柄・心情などに比するのが簡便で, 効果的な方法の一つであった。一方, 読者が一句に籠められた作者の真意を理解するためには, 「当座性」を了解した上で, これに関連した典拠を探り当て, 機縁の法に配慮しながら解釈することになる。典拠・博引旁証の的確な指摘は, 現代人にとっては特別に難事である。が, この点に関しては, 幸いにして「江東避乱聯句」に対する抄物が現存することは前述した。抄物における解説は, 句の典拠に関するものが大半である。

禅林聯句の研究の辿り着く到達点は, やはり一句一句の句意を明らかにした上で鑑賞し, これを積み上げて一巻の聯句として理解, 評価することである。表の意味は語釈の積み重ねからもある程度まで理解が可能であるが, 裏の意味は当座性と先行文芸に求められる典拠の意味とをうまく融合することができなければ理解, 解釈が不可能である。

未開拓な分野の作品に取り組んでいるために, 新たな問題がこれからも生じることであろうが, 究極の目的が新しい作品解釈法を確立しようとするところにある訳であるから, これら難事を克服しながら一步一步前進したいものである。

(B02「伝承と受容(日本)」班・公募研究)

# 名歌の横顔

## 古典和歌再読

福田 智子  
福岡女学院大学 非常勤講師

南里 一郎  
純真女子短期大学 助教授

竹田 正幸  
九州大学大学院システム情報科学研究院 助教授

### 1

著者らは以前、古典和歌における表現授受の系譜をたどることで、ある歌集の成立年代特定に成功したことを報告した（「古典和歌における類似歌発見断章」、古典学の再構築ニューズレター第7号「研究ノートから」、平成12年7月）。これで、未確定要素をはらんだまま構築されてきた、和歌史の片隅を、ささやかながらひとつ修正したことになる。この、歌集の成立年代という最も基礎的な事柄の把握にあたり、まず必要だったのは、平安、鎌倉、室町といった、時代ごとに細分化された専門分野の壁を破ることであった。そこで役に立ったのが計算機だったことは、既に拙稿に述べたごとくである。

類似表現をもつ歌を計算機で抽出する方法を用いると、用例収集の手間を格段に省くことができる。とともに、これまで用例を収集するツールとして用いられていた句索引による検索の難しい、今まで気づきにくかった類似歌を発見することもある。今回は、有名歌人の代表歌が、じつは替え歌であったという事例をご紹介します。

### 2

藤原兼輔（877～933）という人物がいる。藤原北家良門の流れを汲む平安中期の公卿で、堤中納言とも呼ばれ、主に醍醐朝に活躍した。歌人としても名高く、三十六歌仙にも撰ばれている。特に、

人の親の 心は闇に あらねども  
子を思ふ道に まどひぬるかな

という歌は、『後撰集』（『古今集』に次ぐ2番目の勅撰和歌集）や『大和物語』（平安期の歌物語）に載っており、彼の代表歌中の一首として、和歌研究者のみならず、一般向けの短歌雑誌などでも採り上げられるほど、人口に膾炙している。

懸詞とか縁語とか、当時多用された和歌的技術もほとんど用いられていないのがこの場合はいい。闇ではないけれども、まるで闇路であるかのように迷ってしまうことだ、とわずかに比喩的表現が用いられているに過ぎないが、自分の子供のことになるとう理性を失ってしまう親の姿が痛いほどよくわかるのである。

久保木哲夫氏  
「古典秀歌鑑賞 心の闇 子を思う親の情」  
（『短歌』36 13 平成元年12月）

親の切ない愛情を表現するのに、三句の「ども」と結句の「かな」の呼応がより以上の効果をあげている。上句が人の親の心は闇ではないと述べながら、下句では結局子ゆえの闇にまよってしまったことだと対照的表現の中に、理屈ではどうしようもない親子の恩愛の情が訴えられているのである。

雨海博洋氏  
「古典秀歌鑑賞 心打つ親の真情」  
（『短歌』37 1 平成2年1月）

この歌が鑑賞される時、必ずといっていいほど、「自分の子供のことになるとう理性を失ってしまう親の姿」（久保木氏）、「理屈ではどうしようもない親子の恩愛の情」

(雨海氏)が、中心に据えられる。それもそのはず、子を思う親心を表す「心の闇」という語は、この歌から生まれ、兼輔の曾孫、紫式部は、実に26回にわたり、この歌を『源氏物語』の引き歌としている\*1のである。

### 3

このように、兼輔の「人の親の」歌は、もっぱら、普遍的な「親心」そのものに注目されてきた。一方、歌の表現については、「懸詞とか縁語とか、当時多用された和歌的技巧もほとんど用いられていないのがこの場合はいい」(久保木氏)というように、無技巧ともいえる率直な感情の吐露が、むしろここでは評価されている。ところが、そういった見方が一般的である中、この兼輔の歌が、じつは『古今集』の恋歌の替え歌であることは、これまで存外看過されてきたように思われる。

この兼輔歌とよく似た表現をもつ歌が、『古今集』にあることに気付いたのは、『古今集』と『後撰集』との間で、類似歌を自動抽出した結果をながめていた時のことである。計算機が、ある指標に基づいて\*2類似度の高い順に歌の対を列挙したもののの中に、例の兼輔歌があった。そして、これと対になっていたのは、次の『古今集』清原深養父の歌である。

(題しらず) 深養父

人を思ふ 心は雁に あらねども  
雲居にのみも なきわたる哉  
『古今集』巻第十二恋歌二、585番

ここで、両歌の類似点をより明確にするために、漢字を仮名に改め、同一文字列に下線を施してみる。

ひとをおもふ / こころはかりに / あらねども /  
くもにのみも / なきわたるかな  
『古今集』585番、深養父

ひとのおやの / こころはやみに / あらねども /

こをおもふみちに / まどひぬるかな  
『後撰集』1102番、兼輔

「ひと... / こころは...に / あらねども / ... / ...るかな」という、全体の構造が一致することは、一目瞭然である\*3。前掲の雨海氏が、「親の切ない愛情を表現するのに、三句の「ども」と結句の「かな」の呼応がより以上の効果をあげている」と指摘された箇所も、深養父歌の枠組みをそっくり借用した部分ということになる。そしてさらに、両歌をよく見てみると、傍線部以外の箇所でも、第二句の「かり / kari / (深養父歌)」と「やみ / yami / (兼輔歌)」という語について、ともに[-a-i]という母音が共通している。

この『古今集』歌の作者、清原深養父は、兼輔と交友があり、両歌の詠歌時期の前後関係には慎重を期さねばならない。けれども、深養父の歌が載る『古今集』の成立年代\*4と、兼輔歌が詠まれたと推定される年\*5とを考え合わせると、どうやら、兼輔歌の方が後に詠まれたと見てよいようである。詠歌年代においても、兼輔の歌が、この深養父歌をもとにして作られたと想定するのに、ことさら支障はないであろう。

### 4

『後撰集』は、この兼輔歌の詠歌状況を、次のように説明する。

太政大臣の、左大将にて、相撲の還饗し侍ける日、  
中将にてまかりて、事終りて、これかれまかりあ  
かれけるに、やむごとなき人二三人許とどめて、  
客人、主、酒あまたたびの後、酔にのりて、子ども  
の上など申しけるついでに

『後撰集』巻第十五雑一、1102番

ここに記されるような宴会の場で、例の兼輔歌が披露された場合、普遍的な「親心」を詠み上げたという以上に、『古今集』の深養父の恋歌を下敷きにした歌として、賞賛されたはずである。とりわけ上句は、『古今集』



歌の「人... / 心は...に / あらねども」という枠を踏まえつつ、もと歌の「雁 / kari / 」にちなみ、同じ母音の語「闇 / yami / 」を、同じ位置に差し替えて作られている。この表現の効果は、宴に集う人々の面前における朗詠でこそ、生かされてくるだろう。つまり、この替え歌の発想に気付いてもらわなければ、この歌は座興として真の精彩を欠くことになる。そこに集った人々は、『古今集』歌の一途な恋心を、親心に置き換えるという兼輔の機知に、必ずや気づいたであろう。

この兼輔の替え歌は、もとの深養父歌以上に有名になった。それは、親心を率直に言い当てたこの歌が、深養父歌との関わりにおいてのみ鑑賞に足るものではなく、宴会という作歌の場を離れても、自立した表現と内容とをもち得たからであろう。その証拠に、『大和物語』で、この歌は、兼輔が娘の桑子を入内させた頃、帝へ献上した歌ということになっている。

堤の中納言の君、十三のみこの母御息所を、内に奉りたまひけるはじめに、帝はいかがおぼしめすらむなど、いとかしこく思ひなげきたまひけり。さて、帝によみて奉りたまひける。

人の親の 心はやみに あらねども  
子を思ふ道に まどひぬるかな  
先帝、いとあはれにおぼしめしたりけり。御返しありけれど、人え知らず。

『大和物語』45段

この場面では、替え歌としての側面は払拭され、兼輔歌そのものの主題、親の子を思う情に焦点が絞られる。そして、この読みによって現代に至るまで、この歌は鑑賞し続けられることになるのである。

## 5

兼輔がこの世を去った時、彼を庇護者として頼りにしてきた紀貫之は、土佐の地にいた。『土左日記』は、貫之が土佐守の任を終え、上京する途次の旅日記である。ただし、今日の「日記」とは異なり、多分に虚構性をはらんだ作品であることが知られている。

次に挙げる文章は、正月十一日条の終わりの部分である。兼輔の「人の親の」歌を踏まえた歌によって、この日の記事は締めくくられる。

下りし時の人の数足らねば、古歌に、「数は足らでぞ帰るべらなる」といふ言を思ひ出でて、人の詠める、

世の中に 思ひやれども 子を恋ふる  
思ひにまさる 思ひなきかな  
と言ひつつなむ。

貫之らは、京から連れて下向した女子を、土佐で亡くした。それで、上京する今、下向時の人数に足りないというのである。「古歌」は、『古今集』巻第九羈旅歌、412番で、女が亡き男を慕って詠んだ歌であった。

題しらず よみ人しらず  
北へ行く 雁ぞ鳴くなる 連れてこし  
数は足らでぞ 帰るべらなる  
この歌は、ある人、男女もろともに人の国へまかりけり、男まかりいたりてすなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に帰る雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ

それを、『土左日記』では、「親の子を思うことへ変容して見せ」\*6、そこから、親心を詠んだ最後の歌 兼輔歌を踏まえたへと続くのである。

兼輔歌を下地にした歌の直前に、恋情を詠んだ『古今集』歌が、一見、雁の歌とは気付きにくい下句のみ引用されているというのは、いかにもおもしろい。ここでもし、想像をたくましくするならば、貫之は、兼輔の「人の親の」歌が、『古今集』の深養父歌の替え歌であることを念頭に置いて、この部分の文章をもしたのであるまいか。兼輔がもと歌にした深養父歌も、雁を詠んだ恋歌であった。それを親心へ変容させるといふ発想が、両者であまりにも似通っているように思われる。少なくとも、『古今集』撰者の一人でもあった貫之には、兼輔の「人の親の」歌を思い浮かべた時、その背後にある『古今集』歌が、はっきりと認識されていたはずである。ひょっとすると、『土左日記』の記

述の中に隠された連想の糸を、ここに補ってよいのかもしれない。

## 6

これまで、兼輔の「人の親の」歌と深養父の歌との、表現上の類似性が見過ごされてきた原因のひとつには、まず、句索引で検索しにくいという点があるだろう。多少とも慣れた者ならば、「ひと…」「こころは…」「あらねども」といった句によって、類似歌を収集しようとは思わないであろう。ところがこの場合、句頭から見た共通文字列は、これら以外にないのである。

それでは、総索引ではどうか。深養父歌の収載される『古今集』は昭和33年、兼輔歌が載る『後撰集』でも昭和40年には、早くも総索引が出版されている\*7。実際、『後撰集』の総索引作成をきっかけとして、『古今集』との類似歌をまとめた論も、昭和39年11月に発表されている\*8。だがそこで、「ひと…/こころは…に/あらねども/…/…るかな」という歌の骨組み(パターン)を拾い出すのは難しかったようである。

計算機による類似歌抽出は、このように、句索引や総索引で気付きにくい、表現のパターンを探し出すのに力を発揮する。この方法によれば、歌が詠まれ、伝来する過程で、すっかり忘れ去られてしまった作歌の手の内を、他にも発見できるかもしれない。それらをひとつひとつ探し出し、点から線へと結びつけていくことが、あらたな和歌表現史の構築につながってくるであろう。我々はまだ、この新しいツールを手に入れ、第一歩を踏み出したばかりなのである。

## 注

- \* 1 伊井春樹氏他編『CD ROM 角川古典大観 源氏物語』(角川書店, 1999年10月) 引歌検索による。
- \* 2 この点について、詳しくは、竹田正幸, 福田智子, 南里一郎, 山崎真由美, 玉利公一「和歌データからの類似歌発見」(『統計数理』第48巻第2号, 2000年, 受理印刷中)を参照されたい。
- \* 3 他にも、「おもふ」という語が両歌に共通する。ただし、久曾神昇氏『古今和歌集成立論』資料編上・中・下(風間書房, 昭和35年3月, 9月, 12月)によれば、兼輔歌の初句には、「人こふる」(前田本・基俊本)「人をこふる」(志香須香本)という異同がある。なお、基俊本は、「他系統本に加へた校合によつて推定復元した」(凡例)のもの。
- \* 4 『古今集』は、延喜5年(905)に成ったと見られるが、延喜13年(913)に催された亭子院歌合の歌を増補するなど、その後十年ほどの間に、いくらかの歌が増補されたようである。
- \* 5 柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』(武蔵野書院, 昭和56年2月)によれば、『大和物語』と『後撰集』とに記された詠歌状況を総合的に考慮し、歴史史料を検討した結果、延喜21年(921)の作である可能性が最も大きいという。また、岡山美樹氏『大和物語の研究』(桜楓社, 平成5年6月)「第四章 他歌集と『大和物語』との関係について 二、『兼輔集』と『後撰和歌集』と『大和物語』」は、延喜21年、もしくは翌延長元年とする。いずれも推定詠作時に大差はない。
- \* 6 『日記文学事典』(平成12年2月, 勉誠出版)「土左日記」【古今集との関係】(長谷川政春氏)。
- \* 7 『古今集総索引』(西下経一氏, 滝沢貞夫氏, 明治書院)、『後撰和歌集総索引』(大阪女子大学国文学研究室)。
- \* 8 片桐洋一氏「後撰和歌集表現考」(『女子大文学』国文篇, 第16号)。

(B02「伝承と受容(日本)」班)